

歴史

探訪

「うつくしま」への系譜



自転車は、世界中で一番多く利用されている乗り物と言っていいでしょう。長い年月をかけて、実に多くの人によって考案開発され、現在の形に至った自転車。日本でも明治時代の初め、これに関心を持ち、大きな夢を抱いた人がいました。それは、現存する日本最古の自転車「三元車」を考案製作した鈴木三元（1814〜1890）です。ここでは、五代目鈴木三元さんにお話を伺いながら、三元が新しい可能性を切り開いた先見の明とチャレンジ精神に思いをはせてみました。

世に役立つ交通機関を創りたい

江戸幕府が倒れ、明治となった世の中は、まさに「文明開化」。何もかもが急激に変わっていく時代を迎えました。これを目の当たりにした鈴木藤右衛門は、「心機一転して新しい時代を切り開かなくては」と名前を「三元」と改めました。三元は伊達郡谷地村（現桑折町）の富農の家に生まれ、村長などの公職を務めるかたわら、日本三大鉱山の一つに数えられていた半田銀山の経営にもあたっていました。そんな彼が改名したのは58歳の時。当時、普通なら

日本最古の自転車を製作

鈴木三元が夢見た

三元車の口と



鈴木三元
三元が独自のアイデアで作った自転車の元祖「三元車」は、明治初期、自由な発想を生かそうとした「文明開化」の精神そのものでした



山形で発見された一人乗りの三元「自走車」。車輪が2つある方が前方で、足で踏んだ動力を車輪に伝え、両手で方向を取りました（現在は国立科学博物館で管理）



昭和59年(1984)に開催された「明治自転車文化展」では、現存する日本最古の自転車である「三元車」の展示が最も注目を浴びました

もつ隠居していてもおかしくない年です。彼の心をそこまで突き動かしたのは、いったい何なのでしょう。新しい時代に必要なものを作って、世の人の役に立ちたい。「先祖様はそんな思いを強く持っていました」と、五代目三元さんは語ります。

三元の地元は、古くから交通の要所でした。その上、半田銀山があり養蚕も盛んで、銀山には明治天皇も視察に訪れるほどでした。そんな人々の盛んな往来を目にした三元は、「これからの世の中は、人を運ぶ交通機関が重要になってくるに違いない」と考えました。そしてそのために、自分の力で走ることのできる車ができないものだろうかという夢を抱いたのでした。人力車は人に引いてもらわなくてはならない。馬車も馬を消耗品のように扱っている。また鉄道は多額の資金が必要となる。三元は常々、二つした状況を見かねていたので。当時は外国でも自転車の開発が進められていましたが、そんな情報がすぐ日本に伝わってくる時代ではなく、自転車という発想は、三元の独自のアイデアでした。また世界的にも、公園などでの遊び道具の域を超えていなかった自転車を、これからの交通機関としてとらえた三元は、非常に高い先見性を持っていたといえるでしょう。

時代の先駆け、三元車を完成

58歳で改名し、60歳にして自転車の製作を思い立った三元。しかし彼には何も参考にするものがなく、また学校で基礎になる字問を学んだわけでもありません。そして機械づくりに部品が必要ですが、自転車の部品など、だれも見つかることもなければ、どう作ればいいのかも見当がつかず、それでも三元は、心血と私財を投じながら、地元のかじ屋や大工と試行錯誤を繰り返して、明治9年(1876)に三輪自転車「自走車・大河号」を完成させます。以後三元は創意工夫を重ね、二人乗り・四人乗りを製作。それぞれ「自在車」「奔走車」と名付け、これらの車は1日30里(120km)から40里(160km)まで走ったと言われます。さらに三元は明治14年(1881)、内国勲業博覧会に一人乗り・二人乗りを出品。江戸っ子の人気を集め、要人の板垣退助を乗せて上野不忍池を一周、板垣から開発製造の激励を受けました。

しかし、課題も多く残されていました。坂道運転の大変さを克服することや、実用化のための製造の簡略化と経費の削減が求められたのです。博覧会の後、東京で製造を始め、横浜に販売所を置きましたが、売れ行きは伸びませんでした。一人乗りが26円。当時の労働者の日給が30銭にも満たない頃でしたから、今でいえば高級外車並み、一般的にはまだ高価なぜいたく品だったのでしょう。また急激な技術革新の波を乗り越えるには、三元は高齢になりすぎていたのかも知れません。やがて豊富な資金も底をつき、三元は東京から撤退を余儀なくされました。明治初期という時代は、彼の卓越した先見性に、まだ追いつけなかったのかもしれませんが、自転車はそれから数十年経った大正時代に、庶民の足として急速に普及すること



三元が書き残した日記は、長期にわたる製作の過程が記された貴重な資料となっています



桑折町内にある鈴木三元代々の墓。自らの挑戦から百年余りを経て、自転車が広まった世の中を、静かに見守っているかのようになります。

なります。

チャレンジ精神を未来へ

五代目三元さんはこう語ります。「世のために役に立ちたいと、初代三元が、ここまで精巧に、ち密に考え抜いて、一つの形にしていた創造力と行動力。これは子孫の誇りです」。発明や発見は、優れた発想と頭脳、長年の研究と多くの資金が必要で、それが成功するのはほんの一握りだと言われます。それにも関わらず、60歳を過ぎ、地方から上京してまで夢を成し遂げようとした三元には、いまを生きるわたしたちが心に刻むべきチャレンジ精神があります



四人乗りの三元車を説明する五代目鈴木三元さん。「初代三元は、これで現代の乗合バス、あるいはタクシーのような交通機関を構想しました」

た。

夢とロマンを追い求めた三元の精神を未来に受け継いでいきたい。そんな思いは、「こおりサイクリングフェスティバル」という形で受け継がれています。地域の子どもたちに夢を持たせるために、自分の信じた夢とロマンを追い求めた三元に学ぼうと、三元車を原点に、桑折町を自転車発祥の地としてPRし、多くの人々が参加するサイクリングが企画されたのです。このフェスティバルは平成5年に初めて開催され、今も実施されています。サイクリングのコースには山登りの道もあり、参加者にとっては大変です。また主催者側も、こういったイベントを継続して実施することは苦勞の連



平成5年から開催されている「こおりサイクリングフェスティバル」。三元の抱いた夢とロマンに思いを馳せながら、毎年多くの参加者が健脚を競います(今年は8月17日開催。お問い合わせは、こおりサイクリングフェスティバル実行委員会 ☎024-582-6152まで)

続です。しかし、「やめればそれで済んでしまうが、それでもやり遂げる。やり続ける」そんな達成感を感じることが、三元の思いを引き継ぐことになる……そう考える人の輪は毎年広がりが続き、町内外から多くの人々が参加しています。

三元が書き通した行動の原点は、先見の目をもった新たな創造性や豊かな発想、おう盛なチャレンジ精神にありました。そんな彼が作り出した三元車は、今を生きるわたしたちに、「時代をしっかりと見定め、新しい時代を切り開け！」と、未来への熱いメッセージを送りながら、人々の心の中を、今もなお走り続けているのかもしれない。